

＜ヤングケアラー支援研究事業総括：大分＞

児童家庭支援センター「和（やわらぎ）」

この一年、ヤングケアラー支援研究事業を行い、これまでとは違った新たな視点を持って支援することが出来、支援の幅が広がったように感じます。児童家庭支援センターとして、これまでも子ども達へ直接支援は行っていましたが、それが子ども達の本当のニーズだったのか、改めて考えることができました。今回、人件費と食材費・娯楽費といった予算がついたことで、子ども達と会う機会も増え、一緒に何かをすることで、子ども達が求めていることや物がわかり、今までの支援では出来なかったことも可能となりました。

「本当は部活の時にデオドラントシートがあるといいんやけどな…パパやママには言えんけど…」と呟いた女子中学生は、これまでもこういった我慢がいくつもあり、その積み重ねが何に対しても「諦める」ことに繋がっていたのだと思います。次の訪問時に彼女に手渡し、とても喜ぶ姿がありました。物だけでなく、学習の機会や自分の時間など確保してあげることで、「諦めなくてもいい」という経験をこれからも増やしてあげられたらと思います。

児童家庭支援センターゆずりは

本事業において、ヤングケアラーについて学びを深められたことは大きな成果であった。それに加え、当センターが関わる子ども・家庭に経済的な支援が実施できたことで対象家庭との距離がグッと近くなり、ニーズに応じた対応ができたことは大変ありがたかった。また、生きるための経済的な支援ではなく、子どもが健やかに成長するためにどんな豊かな時間を過ごせるかにフォーカス出来たことで、相談員自身も前向きになれ、子どもの嬉しそうな顔を見ると、次への活力ともなった。

さらに、事例検討において、専門の先生方からの助言は、ヤングケアラーに限らず、相談支援を展開する上で、ヒントとなり、新たな視点から自身のケースを振り返ることができた。特に、支援において子どもの担う役割を代替することに視点が行きがちであるという斎藤先生の指摘は、印象に残っている。同時に、子どもが成長する過程で何が大切かを子ども自身と向き合い続けていきたいと感じた。

子どもセンターパーネム

これまで「ヤングケアラー」という言葉は、耳にすることは多くありましたが、意識してケアを行うということをしていなかったということに今回の事業を行わせていただく中で感じることができました。意識をしてみると、今まで関わっていたケースの中に、「これってヤングケアラーだよ」というケースが多くありました。これまでも物資の支援などは行ってきましたが、食事のケアや小さい子のオムツ等が多く、そのような家庭の中で、色々な事を我慢し、生活をしている子に少し気持ちにうるおいを与えるような提供が出来たように思います。当センターで関わったケースは、幼児が多い家庭で、中学生の対象児は、幼児らが新たな物を購入したりして貰っている中、我慢をするという状況が多く目についていました。今回の事業では、そのような子を対象として、洋服や雑貨等の提供が出来た事は、今まで行ってきた事業とは大きく違う所でした。このようなケースに合わせた臨機応変の

対応が出来た事は、今回の事業のお陰かなと思っています。

この1年、「ヤングケアラー」という事を意識していく中で、応援をしてあげたいなという児童も新たに数名出てきました。来年度もこの事業が展開されるのであれば、様々な形での応援を考えていきたいと思っています。